

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 4 日現在

機関番号：13901

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23652115

研究課題名(和文)日本語非母語話者会話における修復とその相互行為的意味：日本語学習への応用に向けて

研究課題名(英文) Analysis of Repairs Appearing in Non-native and Native Japanese Speakers' Conversations: Applications to Japanese Language Education

研究代表者

初鹿野 阿れ(Hajikano, Are)

名古屋大学・国際教育交流本部・准教授

研究者番号：80406363

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円、(間接経費) 360,000円

研究成果の概要(和文)：日本語非母語話者(NNS)1名と母語話者(NS)2名の雑談に現れた「他者開始修復(聞き取り、理解の問題に対処するやり方)」連鎖を分析した結果、NS同士に比べ、NNSとNSの修復連鎖は、長く、構造が複雑になることが観察された。NNSがNSの発話に対して開始した修復は、ゆっくりと易しい言葉で行われたり、既にNNSが理解しているにもかかわらず続けられたりする事例がみられた。NNSの発話に対してNSが始めた修復も、NNSに対して配慮を示しつつ行われているが、対等な参加者としてNSの配慮のあり方に再考を促すような事例も観察された。この結果を日本語教師が意識し、NNSとの会話にかかわることは重要であろう。

研究成果の概要(英文)：This study investigates the "other-initiated repair" sequences in non-native (NNS) and native Japanese speakers (NS), which refers to the participants' ways of coping with problems in hearing, or understanding during conversation. Results found that the repair sequences between NNS and NS tend to be longer and more complicated than those involving only NSs. Repair sequences initiated by NNSs in response to a preceding NS's talk were resolved by the NS speaking slowly and using simple vocabulary. In some cases, NSs continue their explanations even after NNSs have already shown their understanding. In repair initiated by NSs in response to NNS's talk, some NSs show consideration toward NNSs as repair indicates that the NS could not understand the NNS's talk. However, in some cases, NNSs show that they consider NS's considerations as inappropriate. This indicates that Japanese teachers need to be aware of other aspects of consideration when talking with NNSs.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：他者開始修復 日本語非母語話者 会話 日本語教育

1. 研究開始当初の背景

「修復 (repair)」とは、会話における発話、聞き取り・理解にかかわる問題に、話し手、聞き手が対処する一連の、組織化された手続きである (Schegloff 他, 1977)。そして、自分の発話の問題に話し手自らが修復を開始するものを「自己開始」、相手の発話の聞き取りや理解の問題に対して、聞き手が修復を始めるものを「他者開始」という。さらに、その問題を、問題の発話者自らが解決する「自己修復」と、聞き手が問題を解決する「他者修復」がある。つまり、「修復」には、誰が始め誰が問題を解決したかにより、自己開始自己修復、自己開始他者修復、他者開始自己修復、他者開始他者修復がある。

Schegloff 他 (同上) は、一般に自己修復が他者修復より優先すると指摘した上で、例外的に他者修復がさほど制約に縛られずに起こる例として、大人と子供、能力を持つ者と持たない者の間のやり取りを挙げている。

この知見に基づき、言語教育・研究者により教師と学習者、母語話者と非母語話者の会話に現れる修復の研究が行われるようになった (Wong, 2000 他)。これらは主に英語会話での研究であり、日本語教育という視点からの研究はまだあまり多くない。また、3人以上の複数人数での日本語会話における修復の分析もあまりみられない。

そこで、本研究では、日本語学習・教育への応用を視野に入れ、日本語非母語話者 (NNS) と母語話者 (NS) 3 人の日本語による雑談で、「修復」がどのように行われ、どのような役割を果たしているかを明らかにすることを旨とした。

2. 研究の目的

本研究では、NNS、1 人と NS、2 人の 3 人の雑談に現れた修復、特に、他者開始修復 (他者開始自己修復、及び他者開始他者修復) に焦点を当てた。NS 同士であっても、会話の中で相手の発話が聞き取れなかった、理解できなかったという問題が起こり、聞き返したり、意味の確認や説明要求をしたりすることはよくある。他者開始修復に焦点を当てた理由は、NNS と NS との会話において、聞き取りや理解の問題にうまく対処することは、お互いにとって重要であり、必須であるからである。

本研究は、雑談に現れた他者開始修復 (以下「修復」) がどのような問題 (トラブルソース) を対象としていたか、その「修復」が参加者によってどのようになされ、どのように解決されたかを記述・分析することを目的とする。NNS と NS のどちらが修復を開始したかによって、「修復」が解決に至るやり取りに違いがあるかにも焦点を当てた。

比較のために NS、3 人の雑談も収集し、そこに現れる「修復」も検討した。

3. 研究の方法

(1) データ収集

分析対象としたデータは、大学生、大学院生 3 人の雑談である。NNS、1 人と NS、2 人の 3 人のデータを 5 組、NS 同士 3 人の会話を 3 組収集した。3 人のうち 2 人はほぼ初対面である。事前に話題を決めずに自由に話してもらった。時間は 1 組 1 時間程度である。会話はビデオカメラと IC レコーダーで録画・録音し、文字化した。それを会話分析の手法を用いて詳細に文字化し、分析を行った。文字化については、西阪他 (2008) を参照のこと。分析するに当たり、同様の手法で既に収集済みであった 3 組 (NNS、1 人と NS、2 人) のデータも合わせて検討した。

(2) データ分析

本研究では「修復」のデータを概観した上で、以下の特徴を持つ事例に焦点を当てた。

NS の発話に問題 (トラブルソース) があり、それに対して NNS が始めた「修復」

NNS の発話にトラブルソースがあり、それに対して NS が始めた「修復」

については、「修復」が解決に至る過程において、会話参加者 3 人全員がかかわっている事例を特に取り上げた。

双方における「修復」の過程を詳細に記述し、そこで行われていることを分析した。

(3) 日本語教材に現れた修復の考察

「修復」についての分析結果を日本語学習・教育に応用するため、既存の日本語教科書の聴解教材などにおいて自己開始修復や他者開始修復がどのように扱われているか調べ、その傾向を明らかにすることを試みた。その上でそれぞれの修復のタスク内での役割を考察した。分析対象として、初級及び初中級者向けの、学習者が耳で聴くこと重視されている教材を 3 冊選んだ。初級、初中級の教材を選んだ理由は、学習者が一番聞き取りや理解、発話のトラブルを抱え、その対処に困難を感じる段階であると考えたからである。教科書の中のモデル会話や練習会話から修復と思われる例を収集し分析した。

4. 研究成果

(1) データに現れた「修復」の概観

「修復」はもとの話の流れに差し挟まれる挿入連鎖であり、多くの場合、修復がなされるともとの流れに戻る。事例 1 のように、M の「何てところですか?」という質問が W にとっての問題 (トラブルソース) となり、「ん?」と W が修復を開始する。M がそれに「何てところ?」と質問を繰り返すことで、修復を行う (問題を解決する)。修復連鎖が終わったところで、M の最初の質問 (1 行目) に対して、W が「サンパウロ」と答えている。

【事例 1】

1 M: へえ... え (.) 何てところですか?

2 W: ん? 修復の開始

3 M: 何てところ? 修復

- 4 W : サンパウロ=
5 M : =あ サンパウロ .

NS 同士の会話に現れた「修復」は、事例 1 のように比較的単純なやり取りで、修復が解決に至り、もとの話の流れに戻っていくものが多くみられた。

一方、NNS を含む会話では、「修復」はより長く、複雑なかたちで現れることが多かった。事例 2 は、NNS である K が NS の H に、「今(習っている)中国語 ど(う?)」と聞いている。(下線はその音が強く発話されていることを表す。)しかし、1 行目の「ど」がトラブルソースとなり、H が「ん?」と「修復」を開始している。「ん?」は K の 3 行目、2 回目の「ど」と重なっているが、K はもう一度「ど」と繰り返し、修復を試みている。それでも H の反応がないため、K は、中国語が「しゃべる h?」と言い換え、さらに「しゃべれる?」ともう一度言い換えることで、繰り返し修復を行っている。それにより、H は K の最初の質問を理解し、「さ:::」と答え、笑う。

【事例 2】

- 1 K : ま 今 中国語 ど
2 H : うん [ん?
3 K : [ど (.) ど (.) ちゅうごう
ご (.) しゃべる h? ¥しゃべれる?¥
.hh
4 H : さ::: ha ha ha .hh

このように、NNS を含む会話では、「修復」の過程で、NNS の言い直し(自己開始された自己修復)等の発話の問題が起こることで、解決に至るまでが長く、複雑になる事例が多くみられた。これ以外にも、NNS により開始された「修復」自体が、うまく言葉が出ない、適切な表現が見つからない等の自己開始修復として現れ、それが NNS 本人や他者である NS によって修復されていく等、複雑なやり取りとして行われていることが観察された。

(2) 日本語教科書における修復の扱われ方

分析結果として、自己開始自己修復と分類された事例は僅か 1 例であった。他者開始修復と考えられるものは約 10 例あったが、他者開始自己修復の例数が多く、トラブルソースの「単純な繰り返し」というシンプルな例が半数を占めた。一方、自己開始と他者開始が組み合わさる複雑な修復例も 1、2 例あり、修復の行われ方が、その場面での役割として会話者が行っていることを浮かび上げさせ、場面理解のための情報ともなっていることを考察した。

ただし、修復は実際のやり取りの中で相互行為的に起こることであるため、視線や体の向き、微妙なイントネーションなどが重要である。教材として作成された会話例には、そのような情報が十分ではなく、修復と認定することが困難な事例が多かった。

全体として、実際の会話に現れる修復と比べて、単純化したやり方が多く扱われていたと言えるが、「修復」は学習者のコミュニケーションにとって不可欠な活動である。実際の会話に現れるような複雑な「修復」のやり取りを教材に使用することの必要性が示唆された。

(3) NS の発話に対して NNS が始めた「修復」
NS の発話に対し、NNS が始めた「修復」は、4.(1)の「概観」で述べたように、「修復」の過程が長く、複雑になる傾向がある。事例 3 では、NNS である K が、NS である H の発話に対して何度も「修復」を開始するが、なかなか解決に至らない。(事例中「会館」とは寮のことである。)2 行目の「修復」の開始は、H に聞き取りの問題として扱われ、「うん」と承認することで解決が試みられる。しかし、1 秒の間は問題がまだ解決されていないことを表す。そして、K は 7 行目で再度「修復」を開始する。それに対して、H は「(会館)を出る」を「延長した?」と言い換えることで修復の解決を試みる。K はまだ理解に至らず、再度「えん-」と「修復」を開始しかける。さらに 1 秒の間があり、K は「あ:: あ::」と理解したことを表し、ここで「修復」のやりとりは終了する。そして、1 行目の H の質問に「(会館の)延長はできない」(9 行目、11 行目)と答えることでもとの流れに戻る。

【事例 3】

- 1 H : え キヨさん もう (0.2) で-
出る? (.) か- 会館 .
2 K : かいかん?
3 H : うん
4 (1.0)
5 K : できる? (.) [で-
6 H : [延長した?
7 K : えん-
8 (1.0)
9 K : あ:: あ::延長は-
10 H : あ しない: ?
11 K : できない

事例の中には、事例 4 のように NS がゆっくり、音をのばしながら修復を行っているために、やり取りが長くなるケースもみられた。

1 行目で、S (NS) が 0 (NNS) に何月にコウリク園へ行ったかを聞く。それに対し、0 が少しの間のあとに「ん?」と修復を開始し、さらに少しの間のあともう一度「え?」と修復を始める。それを聞いて S は「オウさんが: コウリク園に: 行ったとき: は: 何月?」と、助詞を強く長く発音しながら質問を言い換えている。この事例は、直前に 0 がコウリク園に行った話をしているので、「何月」が理解できれば、答えられる可能性は高い。にもかかわらず、S の 4 行目からの質問のやり直しは、一番重要な「何月」が最後に現れる組み立てになっている。そのことも、「修復」

のやり取りが長くなり、もとの連鎖に戻って、0がSの質問に答えるのが遅れる理由ともなっているといえよう。

【事例4】

- 1 S: 何月に行きました? オウさん
- 2 (.)
- 3 O: ん? (.) え? =
- 4 S: =えっ t° あオウさんが: [コウリク
- 5 O: [うん
- 6 S: 園に: [行ったとき: [は:
- 7 O: [うん [うん
- 8 S: 何月?
- 9 (0.2)
- 10 O: じゅ.え?(1.0)今月: [の::
- 11 S: [>今月? <
- 12 (.)
- 13 O: 上旬ぐらい-
- 14 S: あ [: は n そうなんだ .
- 15 O: [かな

修復のやり取りが長くなる理由として、NNSが理解を示しているにもかかわらず、NSが説明をし続ける事例もみられた。

事例5は、直前にK(NS)が、J(NNS)の国の料理の番組を見ると「下ごしらえから時間をかけてやっている」と言っている。そのあと、Jが「下ごしらえ」ということばが理解できずに修復を開始している(1行目)。この修復は、「下ごしらえって 前の作業かなんか」や3行目の「準備する」など自分の理解を示すことで行われている(理解候補の提示)。それに対してKは2、4行目でJの理解を承認し問題解決が行われる。5、7行目ではJが「ああ ああ ああ」と理解を示している。さらにJは、7行目で修復の対象となっている語を繰り返すことを試みている。そして9行目で「下ごしらえ」と正しく発音することで、そのことばの意味と形を理解したことを示している。しかし、NS、2人(TとK)は12、13行目で再度意味の説明・承認を行う。Jがもう一度14行目で理解を示しているにもかかわらず、15行目からKがかなりの時間を使って「下ごしらえ」の説明を続けている。

【事例5】

- 1 J: 下ごしらえって 前の作業かなんか()
- 2 K: [ええ そうです [そうです
- 3 J: [準備する
- 4 K: あの: ええ じゅ- 準備です[ね=
- 5 J: [ああ=
- 6 K: [=例えば あの:
- 7 J: [=ああ ああ 下ごしら- 前- 前ごし- [あ 下ごし-]
- 8 K: [下]ごしらえ
- 9 J: 下ごしらえ[()]
- 10 K: [ええ ええ ええ
- 11 J: 初めて きhたh[.h.h.h
- 12 T: [う:::ん 料理で

使[う

- 13 K: [ええ ええ そうです[よね=
- 14 J: [(あ:::うん)
- 15 K: =あの 例えば なんかビビンパとか作るときに:
- 16 J: そ[うですね
- 17 K: [人参とか ナムルと[か
- 18 J: [あ::: あ:
- 19 K: ほうれん草とか そうゆうのに 味つけるじゃないですか . いろんな (以下省略)

NNSによって始められた「修復」のやり取りには、NNSが先を続けようとしているにもかかわらず、NSがそれを先取りして言っている事例もあった。

事例6(Hが何年か後に九州新幹線ができたなら、富山から九州まですぐに行けると発話している。しかし、このデータを取った時点で九州新幹線は既に完成しており、Hは北陸新幹線と勘違いしている)で、MはHの1、3行目に対して修復を開始している(13行目)。「あの九州?」という修復の開始は、Hによって「九州新幹線?」と修復される。しかし、Mの13行目は不十分な修復の開始であったことは、15行目でMが「は」と発話を続けようとしていることわかる。Mが「は」と言うのと重なって、Yは「あ(.)九州新幹線はもうできて」とMが言おうとしていることを先取りするように言う。Mは、それでも、Yの発話に重なって「もう- (17行目)と言い始め、Yが言い終わったあとに「もう(.)できたんですよ:」と、自分が言いたいことを言い終える。つまり、Mは「九州新幹線はもうできたんですよ」という修復を開始しようとしていたといえる。しかし、Mの修復開始の不十分さと、Yの先取りするような発話により、それができなくなる可能性にさらされた。Mはそこであきらめることもできたが、この事例では、Mは自分のターンを取り、17行目で最後まで自分の言いたかったことを言い終えている。

【事例6】

- 1 H: でも- 新幹線 なんか九州まで (.)(こ[んど-)
- 2 Y: [あ そうです[ね
- 3 H: [とお:::る [らしいので:
- 4 M: [う:::う:::ん (中略)
- 13 M: あの九[州?
- 14 H: [.HH hh 九州新幹線?
- 15 M: [は
- 16 Y: [あ(.)九州新[幹線はもうできて
- 17 M: [もう- もう[(.) できたんですよ[ね:
- 18 H: [うん でr- [けど:
- 19 Y: で=

- 20 H: =富山にまだ新幹線ができてない
[んだ
10 M: [あ そうですね

以上の事例でわかるように、NSの発話に対してNNSが開始した「修復」のやり取りは、長く、複雑になる傾向がある。しかし、その原因は、必ずしもNNSだけにあるのではなく、NSの発話スピードや音の引き伸ばし、説明の長さなどにもあった。また、NNSの修復開始をきっかけに、NNSが言いたかったことをNSが先取りしている現象も観察された。それらは、NNSに対する配慮、つまり、相手が理解しやすいように、または、相手が言いたいであろうことを自分が既に理解したことを先取りして示すことで、相手への負担を減らそうとしていることの現れであるといえる。日本語力の足りないNNSにとっては手助けとなり、相互の意味理解を促進するものである。しかし、雑談を対等な参加者によるコミュニケーションと考えた場合、NNSへの配慮のあり方を再考してもいいのではないかと示唆しているともいえるだろう。

(4) NNSの発話に対してNSが始めた「修復」次に、NNSの発話に対してNSが始めた「修復」を分析した。データには、事例2のように「修復」のトラブルソースがNNSの日本語の不十分さである事例が多く観察された。

また、本分析を進めるうちに、興味深い事例として「修復」の開始から解決に至るまでの過程に3人の参加者すべてがかかわっているものが観察された。そこで、このような「修復」の事例を集め分析を試みた。

今回収集したデータには、以下の3つの「修復」のやり取りがみられた。

- NNSの発話中のトラブルソースに対して、NS2人が「修復」を開始している事例
- NNSの発話中のトラブルソースに対して、NS1人が「修復」を開始し、その解決をもう1人のNSが行っている事例
- NNSの発話中のトラブルソースに対して、NS1人がもう1人のNSに「修復」を開始している事例

事例7は の例である。Mは自分は今5年生なのだが留年になっていると言い、この発話が「修復」のトラブルソースとなっている(6行目)。まずYが「留年ていうか う-」と「修復」を開始する(8行目)。すると、HがYの発話に続けるように「休学みたいな感じ」(11行目)と「修復」を行う。それに重なってHも「休学」と言い、Mも「そうですね」と承認することで「修復」が解決している。

この事例では、HとYは2人でお互いに発話を補い、承認しながら共同で修復発話を構築しており、2人が同調しつつ一つの仲間のよう問題に対処しているといえよう。

ここでもう一つ触れておきたいのは、修復のやり取りが終わったあとのHとMの振る舞いである。前述の通り、修復連鎖は挿入され

たやり取りであり、終了したあとはもとの流れに戻ることが期待される。事例7でも、6行目「留年(0.5)になってて」は明らかに発話の途中であり、修復連鎖が終了したあともとの話に戻ることが期待される。しかしここでは、Hが14行目で「あ 一緒だ 私も-」と自分も同じ経験をしたことを話し始める。これはMにとって自分の話が続けられなくなる可能性を生む。16行目のMの発話は、14行目と間合いなく発話されており、さらに「それになって:」と6行目とほぼ同じ形を利用し発話することで、修復のやり取りの前に戻り、自分が話を続ける権利と義務があることを示しているといえる。17行目で、Hが14行目の話を続けることなく、Mの発話を承認するような反応をしていることも、Mの正当性をHも認めたことを表しているといえる。

【事例7】

- 1 M: まあ 5年生:なんですけ [ど:
2 H: [う[ん
3 Y: [うん
4 M: ここに来て
5 H: うん
6 M: 留年(0.5)になってて
7 H: あ
8 Y: [留年ていうか う-
9 M: [りゅー りゅー う-
10 Y: [[あの-
11 H: [[休学 [みたいな感じして
12 Y: [休学- はい うんうん
13 M: [そうですね
14 H: あ 一緒だ [私も=-
15 Y: [ん
16 M: =それになって:
17 H: は:い

次に の事例について簡単に述べる。(詳細は発表論文を参照されたい。)データに現れる3人の参加者の視線、発話のタイミング等を詳細に分析した結果、トラブルソースの話者以外のもう1人の参加者が「修復」の解決を試みるのには、相互行為的に妥当な理由が存在した。しかし、その行為は、自らを含め参加者全員によって不適切な行為であると扱われていることが観察された。

次に の事例を考察する。事例8で、NNSであるKはサッカーの試合を見に行ったことを話している。5行目でKはHに「カタヤマ君.(0.4) キーパー」と言い、Hと試合結果について話す(「カタヤマ君」は3人の知り合い)。そのやり取りが終わり0.8秒の間のあとにIがKではなく、Hに視線を向けて「カタヤマ君がキーパーなの?」と確認する。Iの発話が遅れた理由は、KがIに視線を向けずにHと話していたことと関係があるだろう。

「修復」は、相手の発話に対する聞き手の理解の問題に対処する。これは、自分の理解力についての問題と同時に相手の話し方の問題を持ち出すことにもなりうる。IがHに

あててこの修復を開始したのは、I が K にあてて修復を開始することで生じるかもしれない、K の話し方や語り方に対する否定的な評価を軽減するためといえるかもしれない。

しかし、この行為は同時に、サッカーの試合を見に行ったという語りの語り手である K の立場を脅かすことにもなりうる。この語りについての知識や経験は語り手である K のものであり、K は聞き手からの質問に答える権利と義務を持っている。ゆえに、K 以外の参加者に K の語りの内容について質問することは、K の語り手としての立場を損なう行為となりうる。16 行目で H が I の確認要求に答えているにもかかわらず、17 行目ですぐに K も「うん うん うん Hhh」と確認を与え、さらに、カタヤマ君を応援していることを加えて、語りを継続していることは、K が語り手としての自分の立場を主張していることの現れであるともいえよう。

【事例 8】

- 3 K: [あの :- (0.2) 現場で
4 I: [(咳)]
5 K: 見 h [た h カタヤマくん .
6 H: [う ぶ::ん
7 K: (0.4) キーパー ¥なん(て)¥ .hh
8 H: (あん) [ぼる負け h し h (た h=
9 K: [でも 最後: 負けちゃ=
10 H: [=や h つ h)
11 K: [=ったけ [ど h 四対零 h .hhhh
12 I: [う::ん
13 K: °(ちよと すご-) ん::°
14 (0.8)
15 I: カタヤマ君がキーパーな [の?
16 H: [うん
17 K: °うん [うん° うん Hhh おういん=
18 I: [あ そうなんだ. へ::::=
19 K: [=してい r .hhh °うん°
20 I: [=:::~::~:]

(5) まとめ

雑談における「修復」は NNS、NS どちらが開始したもので、長く複雑になる傾向があった。しかし、その原因は NNS だけでなく NS にもあった。このような複雑な「修復」事例は日本語教材であまり扱われておらず、今後、教材に取り入れ、学習者に意識させることの必要性を示唆している。

また、「修復」のやり取りでみられた、NS の NNS に対する配慮の現れともとれる行為が、NNS によって不適切、または自分の話す権利を脅かす行為と扱われているようにみえる事例があった。これは、NS が示す配慮について再考を促す。NS が NNS と会話するとき、さらには日本語教師教育や教師養成に役立てられる事例なのではないかと考える。

【引用文献】

西阪仰・串田秀也・熊谷智子(2008)。「特集「相互行為における言語使用: 会話データをういた研究」について」、社会言語科学、

10(2)、13-15.

Schegloff, Emanuel A., Jefferson, Gail, & Sacks, Harvey (1977). The Preference for Self-Correction in the Organization of Repair in Conversation. *Language*, 53(2), 361-382.

Wong, Jean (2000). Delayed Next Turn Repair Initiation in Native/Non-native Speaker English Conversation. *Applied Linguistics*, 21(2), 244-267.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2 件)

初鹿野阿れ・山崎けい子 (2013)「3 人会話における母語話者により始められた他者開始修復 母語話者が非母語話者に配慮を示すやり取りの再考」、2013 CAJLE Annual Conference Proceedings, CAJLE (the Canadian Association for Japanese Language Education)、査読無、71-81.

(http://www.jp.cajle.info/wp-content/uploads/2013/10/Hajikano_CAJLE2013Proceedings.pdf.)

山崎けい子・初鹿野阿れ (2012)「日本語教科書における「修復」の扱われ方 -タスク内での役割-」、富山大学人文学部紀要、査読無、57 号、25-38.

(<http://www.hmt.u-toyama.ac.jp/kenkyu/kiyo57/yamazaki57.pdf>.)

[学会発表](計 3 件)

初鹿野阿れ・山崎けい子「3 人会話における母語話者により始められた他者開始修復 母語話者が非母語話者に配慮を示すやり取りの再考」、the 2013 annual conference of the Canadian Association for Japanese Language Education (CAJLE)、2013 年 8 月 24 日、トロント大学.

初鹿野阿れ・山崎けい子「日本語非母語話者が始めた他者開始修復 -母語話者開始との差異を探る-」、日本語教育国際研究大会、2012 年 8 月 18 日、名古屋大学.

初鹿野阿れ・山崎けい子「日本語教科書における「修復」の扱われ方 会話・聴解教材を中心に」、2011 世界日本語教育研究大会、2011 年 8 月 21 日、天津外国語大学.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

初鹿野 阿れ (HAJIKANO ARE)
名古屋大学・国際教育交流本部・特任准教授
研究者番号: 80406363

(2) 研究分担者

山崎 けい子 (YAMAZAKI KEIKO)
富山大学・人文学部・教授
研究者番号: 50313581